

おわりに

もし読者が、ここまで本書を読んできて、新しい未来を切り開くことについての可能性を感じとり、これまでとは異なる新たな次元で挑戦することに好奇心を覚え、自分の内なる勇気を再確認していただけたら、とても嬉しく思う。

私たちは、渾身の努力とともに新しい未来を創造していった物語に触れると、体の中で共鳴し感動するものを覚える。共鳴するということは、私たち一人ひとりの体の奥底に、夢、勇気、挑戦といったものに共鳴する何かを、もともと持っているということなのだ。つまり私たちは、夢を描いて挑戦していくように生まれてきているのではないだろうか。

本書の企画を最初にプレジデント社書籍編集部の上形佳久氏からいただいたのは、八年前の二〇〇一年のことになる。実戦に役立つ経営戦略書を、ということだった。しかしコンサルティング経験等をもとに本を書くことはできるが、逆に、本を読んで実戦に活かせるかという、それはなかなかできることではない。それでも私は書くならば本当に役に立てる本にしたかった。そして私は日本海海戦の作戦計画を構想した参謀秋山真之が、米国留学中に軍事戦略の実戦家であり研究者であるマハン大佐とともに語り合ったとされる「一人から学んだ理論では実戦では役に立たない、現実の中から自らが鍵を抽出したものでないと活かせない」というくだりに、

に、経験上いたく共鳴していた。

たどりついた結論は、本書が第一に、読者が自分の体の芯で夢や勇気に共鳴することを思い起こす一つのきっかけになれば、ということだった。第二に、経営や事業に対して新鮮なさらなる好奇心を抱くきっかけになってほしい。そうはいっても具体的にどこから手をつけたらいいのだろうか——第三には、読者の好奇心がそのような問題意識にいたったときに、読者諸氏のお役に本当に立てる本にしたい、ということだった。そのような趣旨で、各種の実戦事例や研究事例という現場・現実から抽出してきた事業のフロンティア突破のための本質的なヒントを、なるべく實際例に則しながら記述することにした。

ここから先は、自分で、自分たちの組織で、経験しながら力をつけていくことである。本書が、そういう志を立てた読者諸氏にとって現実の事業と社会と自分の人生の夢を実現していくうえで、一つのきっかけとなれば大きな喜びである。

我々、現社会人が直面している事業経営上の問題は難問だらけのように見えるが、実は我々よりも後の世代が解かねばならない課題のほうがますます複雑で、次元の異なる問題の同時解決を必要とするだろう。例えば地球環境問題しかり、食糧問題しかり、グローバルエコノミーのなかでの日本社会の位置づけの再確立、また社会・政治・経済の仕組みの再構築等々——。教育システムもグローバル社会のなかでの真の問題解決に結びつくようなものに直されなければ

ばならない。

我々ビジネスパーソン一人ひとり、組織一つ一つが、新たなフロンティア突破に果敢に挑戦していくとき、そのような意識とエネルギーは、後陣の者たちへも刺激となって新たな共鳴を産み出していくにちがいない。だから私たちが一隅一隅で未来創造のフロンティア突破に挑戦するということは、もっと大きなスケールでの未来創造に参加することになるはずである。だからぜひ、これまで以上に積極果敢にフロンティアの打破と未来創造にエネルギーをそそぐことを誓おうではありませんか。

最後に、本書が生まれるきっかけとなったすべての方々との出会いと出来事への謝辞を述べさせていたきたい。本書の企画は、大前研一氏が塾長を務めるアタッカーズ・ビジネススクールの当時のマネジャーであった松澤斉之氏とプレジデント社の山形佳久氏とのミーティングから生まれたものだ。以来、八年間にわたる山形氏の忍耐とご支援がなかったら、本書は生まれていなかった。

それから、経営課題解決という修業の道をご一緒させていただいたもろの経営プロジェクトや人材開発プログラムの参加メンバーの方々、またそれらの場を提供してくださったクライアント企業とマッキンゼーを含む各種組織の方々、さらに私のコンサルタント活動への問題意識を刺激し、支援してくれてきた仕事仲間。これらの方々との出会いが刺激となって本書の構想は生まれた。

さらには本書の出版を通して世の中に貢献することの大切さを説いて、プレッシャーをかけたサポートをしてくれたのは同僚の木下敏之氏、川口喜久氏、西岡茂憲氏だった。また好美と裕暉からは事業経営の進化を通してであれなんであれ、何事においても現状を打破し、未来へ果敢に挑戦する意識の必要性、重要性を常に思い起こさせてもらった。お世話になったすべての方々に、心より感謝の気持ちを申し上げて筆を置かせていただく。それでは皆様、時代のフロンティア突破に共に邁進してまいりましょう。

本書へのご質問やフロンティア突破に関するエピソード等がございましたら、info@inspark.jpへメールをお送りください。必ず目を通します。また、頂戴したメールは執筆活動やプロジェクト等を通しての社会貢献などに活かしていくつもりですので、よろしく願います。